

Title	<書評>藤田治彦監訳・解説『ダーティントン国際工芸家会議報告書：陶芸と染織：1952年』
Author(s)	谷本, 尚子
Citation	デザイン理論. 2003, 43, p. 90-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52864
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ダーティントン・ホール・トラスト&ピーター・コックス編
『ダーティントン国際工芸家会議報告書——陶芸と染織：1952年』
思文閣出版 藤田治彦監訳・解説
谷本尚子

本書は、1952年7月17日から26日の10日間、イギリスの小さな村ダーティントンにあるダーティントン・ホール（Dartington Hall）で行われた国際工芸家会議の報告書（54年出版）を、本学会会員、藤田治彦、猪谷聡、要真理子、竹内利夫、北田聖子、松友知香子氏を含む18人が共訳し、藤田氏が監訳、解説を加えたものである。

国際工芸家会議の主旨は、第二次世界大戦後、ますます工業化が進む世界において工芸の将来のあり方について話し合い、同時に地方再建の試みとしての新しい小規模産業の創業の可能性を工芸に探るというものであった。

本書の構成は、日本語版への序、本文篇、資料篇、解説の四篇からなる。会議の報告書には、プログラムに記された36の講演、討論、実演の内、講演19、討論2の計21件、付録として「プログラム」、「参加者名簿」、エヴァ・アンティラの「テキスタイルの工芸家たちへの講話」が記録されている。日本ではあまりなじみの無い発表者も多いが、邦訳に際して、講演記録には各々訳注がつけられており、発表者に関する詳細な資料も付加されており、読者に親切な配慮がなされている。資料篇は複写写真であり、次の5つが含まれている。会議の報告書（The Report of the International Conference of Craftsmen in Pottery & Textiles）、国際工芸家会議広報用リーフレット、会議に併せて催された展覧会のカタログ（Catalogue of an exhibition of Pottery and Textiles 1920-1952）、柳宗悦「国際工芸家会議」（『毎日新聞』昭和27年8月21日）、バーナード・リーチ「東洋からの

内からの声」（『毎日新聞』昭和27年8月21日）である。

会議の報告書をまとめたピーター・コックス（Peter Cox）は、導入部分で、この会議では東洋と西洋との関係、工芸と科学技術、工業における工芸家の立場、教育における工芸の位置などが討議されるだろうと述べている。東西の相関関係については、柳宗悦と濱田庄司を招いたバーナード・リーチがその重要性を強調した。また、柳は独自の工芸論「日本人の工芸に対する見方」と「佛教美学」を講演している。工芸と科学技術については、マイケル・カーデューが、好むと好まざるとに関わらず、科学技術は制作の一部であることを、現代の工芸家は認めねばならないと述べている（「科学の進歩と工芸家による応用」）。教育の問題については、教育活動、工芸活動、経済活動の三つのバランスについて述べたジョン・パワーズの講演、「ユネスコの基礎教育プログラム」が興味深い。

さてここで、会議が催されたダーティントン・ホール（1925年設立）について触れる必要がある。監訳者は、会議の報告書を50年後になって翻訳する意義について、「工芸運動史上重要な「1952年国際工芸家会議」の報告書であると同時に、……思想文化史上重要で、なおかつ現代的意義のある理想郷的コミュニティを会場とした「ダーティントン・ホール」の報告書であるからだ」と述べている（p. 553）。

ダーティントン・ホールは、工業化が進むにつれて崩壊していった地方の文化と経済基盤をもう一度取り戻すことを目的として設立

された施設であり、手でものを作ることを楽しむことが重要であるという信念の下、体験学習を重視する農業、工芸、舞踏などを教える学校を含んでいた。即ちこの地では、手仕事の質の重視、土着の条件がもたらす伝統との融和（バーナード・リーチ「工芸家における統合」）、地方再建のための経済基盤という三つの要件が重視される。それ故会議では、美的、技術的問題だけでなく、産業における工芸というのも、重要なテーマであったと思われる。

会議の中で工芸家個人による美的表現と小さな経済との関係を取り上げたのは、A・E・サザンの「優れた染織工芸について」、マリアンネ・シュトラウプの「最初の一步」である。サザンは、アフリカでも工業化が進むに従い、伝統的な染織工芸が衰退していると報告し、良質の工芸を存続させる最良の方法は、小規模な工房を創設することだと述べている。またウェルズの染織工業に携わったことのあるシュトラウプは、工芸家は素材に真摯に取り組むことが重要であり、かつ適切に企業と連携しなければ、小さな工房や個人作家は活動を続けることが出来ないと述べている。二人の報告からは、品質の確保と実験的な試みにとって少量生産が理想であるという意見が見出せる。

これに対して小さなコミュニティが生み出した美的実践とその効果について述べているのが、アグネス・ラウアーの「スイス・ハイマートヴェルクの組織」である。この講演では、貧しい山村で家内労働によって制作した品物を販売し、補足収入源を見出そうとするスイスの民衆による工芸活動が紹介された。ハイマートヴェルクは、大規模な産業が望めない地方の小さな試みであったが、同時に広く民衆に手仕事の製品の質の高さを認識させる試みにおいても成功した。

工芸における北欧の特殊性もまた、この会議では際立っていた。クルト・エクホルムは、講演「フィンランドとスウェーデンにおける現代陶芸と陶芸家」で、生産工程の必要上、スウェーデンとフィンランドの陶芸は必然的に産業界に含まれていると述べた上で、両国では、比較的理想的な形で産業界と芸術家が共存していると説明している。また付録Cとされたフィンランドのエヴァ・アンティラの「テキスタイルの工芸家たちへの講話」からも、家内工業品から機械製品まで、連続的な関係の中で位置付けられている工芸家のありようが読み取れる。

個人的な印象で言えば、この報告書の重要性を示す点として、1、1950年代、ちょうどインダストリアル・デザインという言葉が一般に普及し始めたこの時期に開かれた工芸家会議であること、2、そうした中で工芸家のあり方を求める方法が様々であったこと、の二点を挙げる事が出来ると思われる。だがもちろん、この会議と会議が開かれたダーティントン・ホールの工芸史の中での正確な位置付けは、今後の研究に任さなければならないだろう。